

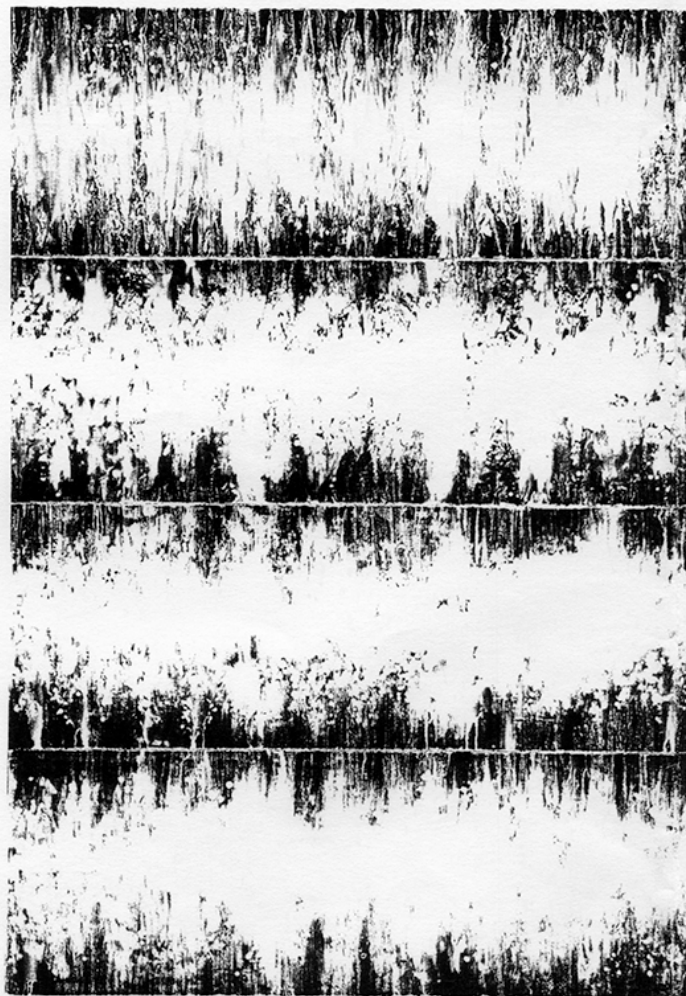
来たる21世紀、美術界ではどんな作家が活躍しているのか、それを占うのがこのコーナーです。各地の美術館学芸員やフリー・キュレーターが毎月交代で執筆、有望作家を2人ずつ紹介します

〈水〉がノイズと化す時

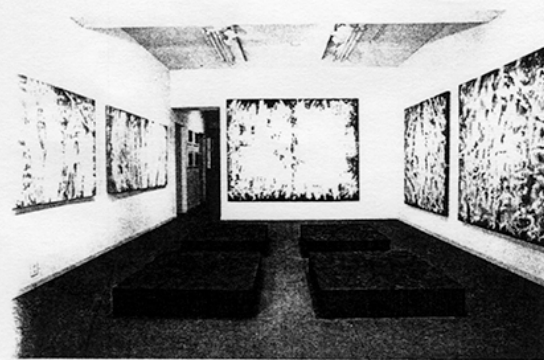
間島秀徳は〈水〉の作家である。それは単に水を使用しているという意味ではないし、むしろ水自体を対象化して描くものでもない。間島にとっての水はより本質的な意味合いを持っている。〈水〉を作家は治水者のごとくに全面的に統治する立場に立てるであろうか。コップの中の水のようにさし当たって捕捉されたかに見せかけた〈水〉は、実はあまりにも可塑性が高く変容するしたたかなものなのである。

間島はそのような〈水〉をあえて場として「絵画」なるものを再生しようとする。和紙に顔料、アクリルという水溶性媒体を使うことは、むしろ珍しいことではない。しかし、ここでは、〈水〉というそれ自体多様な現象性を意味する場で、「絵画」というものの持つ形式性が再考されようとしている。それは「絵画」という古典的にして人為的な場と〈水〉的なものとの共振の中での、身体性と意識の再編成を孕むこととなるだろう。そのたまり 浸り流れ、積層する単なる現象する水は、ひとたび「絵画」の固型的抵抗体に遭遇すれば、幻影のように、あるいはノイズのごとくに出現的なものと化す。作家の内包するアンビヴァレントな感情を超えて、それは「絵画」を巡ってのその内輪郭線上での今日的な抗争劇の様相をも呈している。

(O 美術館学芸員、天野 一夫)



「Untitled 1993」 1993 アクリル 岩胡粉 雲肌麻紙 260×180cm



(撮影 早川宏一)

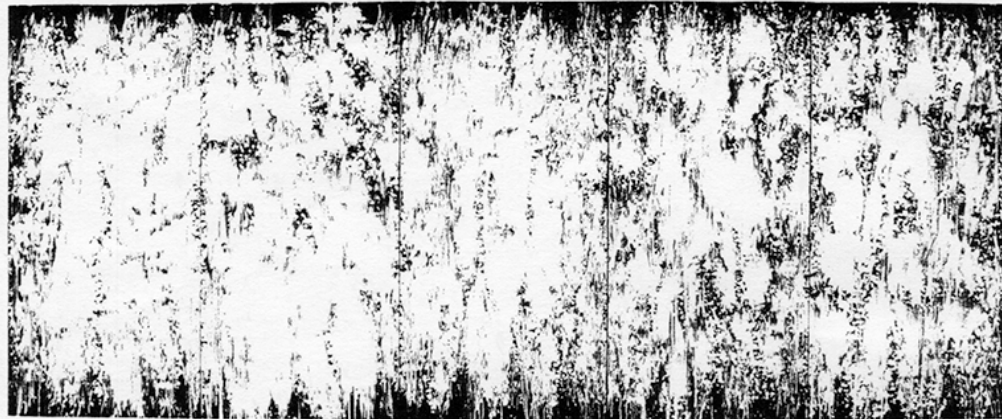
1995年ギャラリーサーージでの個展会場風景



「1992 Untitled」 1992 墨 アクリル 岩胡粉 雲肌麻紙 180×150cm



「Untitled 1992」 1992 墨・アクリル 岩胡粉 雲肌麻紙 180×150cm



「Untitled 1993」 1993 アクリル 岩胡粉 雲肌麻紙 200×480cm



まじま ひでのり

◎生年
—1960年

◎出身地
—茨城県

◎略歴 展覧会歴

—1986年、東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了 個展は88年ギャラリーなつかを皮切りに、ギャラリーK、ギャラリーサーージ、ギャラリー古川、タニシマギャラリーなどで毎年1〜2回の割合で開催している。96年はギャラリーエ アンドウで行った。グループ展は86年「水 水 水」展(ワコール銀座アートスペース)、PROJECT 1「間島 遼辺 COLLABORATION 九十九里」、PROJECT 2「闇の視界 幾何の森」(スタジオ4F) 87年PROJECT 3「目に見えるミ よりできる限り遠く離れて」(秋山画廊) 91年「PLUS 11」展(アートギャラリー京橋) 92年「FURUKAWA SELECTION」(ギャラリー古川)、「PLUS 12」展(アートギャラリー京橋) 93年「現代絵画の一断面「日本画を超えて」」(東京都美術館) 94年「日本画家の青春 新たな時代を開く——大観、春草からドップ君まで」(郡山市立美術館)、「NEW MIND ART 美への脱離し」展(オンワードギャラリー、西武百貨店川崎店) 96年「My House is Your House」(ギャラリーサーージ)

◎扱い画廊

—ギャラリーサーージ(東京)、ギャラリーエ アンドウ(東京)